

京都大学	博士(文学)	氏名	石 立 善
論文題目	「朱子語録」と「朱子語類」の研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は南宋に編纂された思想家の朱子(一一三〇～一二〇〇)の「語録」と「語類」について、思想史學と版本學的方法を融合させ、體系的に考察するものである。</p> <p>第一部「論考篇」。朱子生前、その語録はすでに朱門内部で流傳し讀まれていたが、嘉泰二年(一二〇二)、慶元の黨禁が解禁された後、雨後春筍の如く次々と世に出たのである。以來、朱子門人や私淑者及び後學たちの多くは、朱子語録の収集や傳寫に熱中し、それを讀むことで閑居する朱子に侍し、警效に接するのと同様であると考えてきた。さらに、中には語録を究極の基準として朱子の著書より重視した者もいた。初期朱子學の形成と展開を考究する際、朱子語録の果たした役割を考慮しないわけにはいかない。しかし、このような古本朱子語録には、『朱子語類大全』に收められなかったものが甚だ多く、黎靖德自身ですら目にし得なかった語録書も少なくない。實際、古本朱子語録書の一部は「四録二類」の據った底本である。第一章では宋元の著述や地方志を始めとする歴代の文獻から、『朱子語類大全』(以下、『語類大全』と略稱する)未收の南宋人による朱子語録書四十種を掘り起こし、その編纂事情や存佚を全面的に考察し、「朱子語録」の古層やその流傳の概貌を復原してみた。</p> <p>第二章では、九州大學所藏朝鮮古寫本の詳しい書誌情報を調査することによって、その底本が淳祐十二年(一二五二)の徽州刊本魏克愚寶祐二年手校本であることを明らかにした。十六世紀中葉以前に朝鮮で書寫されたもので、日本へ傳來した年代の上限は十八世紀七十年代であろうと推測し得る。古寫本は本來底本と同じく五十冊に分けられたが、後に四十二冊に改装された。多數の手による古寫本は、底本の原貌を忠實に復元しようとしているが、亂丁や誤寫、脱文などの問題も少なくない。中文出版社の景印本には亂丁があるため、研究の際には現物を確認することが必須である。黃士毅の蜀類は朱子學隆盛の地である四川で刊刻され、テキストと分類の両面において、後世に多大な影響を與えた。その主題別の語類體は、語録の重複整理や黃氏自身の學問上の性格によって創始されたものである。蜀類の重刻増補本である徽類によって、黃士毅の分類とその語類體は正統化・合理化され、定着されるに至った。また、徽類は朱子學の官學化の産物であり、その成立に紫陽書院を中心に朱子の弟子、親族、後學などが密接に関わっていたことがそのような時代性を象徴していると言えよう。徽類は『語類大全』に校勘用としてのみ用いられたため、兩者の系統は異なる。黎靖德編『語類大全』になると、語類體は内容の面において、それまでの語録書を集大成し、さらなる充實を見せ、ついに語録體を乗り越え、主流の地位を奪ったのである。</p>			

第三章は宋刻本『晦庵先生語録大綱領』を論じたが、本書の明以後における傳承の大筋は、明の朱良育→清の曹棟亭→民國の孫俶仁→蔣孟蘋→涵芬樓（商務印書館）→北京圖書館（現中國國家圖書館）となる。本書の「朱子語録」は最古の朱子語録である李道傳編『晦庵先生語録』の抜粹本、つまり池録の「大綱領」であり、その體裁は分類と記録者の兩方を重視し、『晦庵先生語録』と『語類大全』の中間に位置するものである。またその分類は『北溪字義』の類目から影響を受けている。朱子の思想を體系化する一つの試みであると同時に、朱子の語録を読む人のために便宜を圖った小規模な語類であると言える。ただ、同時代に編纂された語録や「語類」と異なり、「太極」をさほど重視しなかった點は注意に値する。本書の朱子語録の『語類大全』に見えない多くの佚文は『語類大全』諸本の校勘や欠落した記録者名の考訂などにも役立つ。本書の附録の諸文と記事は、本文の朱子語録と一體を爲すもので、朱子や范如圭及び朱門弟子の佚文が多く見えており、これらの佚文は若き時代の朱子及びその門人に關する研究において、重要な資料となるであろう。附録上の朱子と范如圭の交わした書簡、問答や附録下の黄榦「先師教人之義」を除いて、附録中の三辨や附録下の「答程珙問仁義之說」と「文公年譜後序」は、いずれも李方子『文公年譜』から直接引用されたものであり、『朱子實紀』に収める「朱子事實」と題された李方子の文章は、もとも「文公年譜後序」の一部であったと考えられる。本書は節本とはいえ、世に傳わらなかった『晦庵先生語録』や『文公年譜』の原貌を反映したものとして、また後世の『朱子年譜』をめぐる朱陸兩派の論争を判断する指標として、重要な價值を持つであろう。本書の編纂者は不明であるが、朱子の弟子あるいは後學と見るのが妥當である。この編纂者は朱子の心性論や修養論を重視し、『易』及び朱子の『易』解釋について興味を抱いている人物であると推定できる。本書は宋末頃の建陽の坊刻本であろうが、その刊行年の上限を嘉定十二年（一二一九）とすべきである。本書は、慶元黨禁の後、朱子門人及び後學たちが朱子の思想を体系的に整理し吸収することや朱子の學問の正統性を主張し確立するという課題解決に向けて編纂された著作であると言えよう。

第四章では、『朱子語録格言』の元・明刊本や朝鮮刻本、和刻本などを詳しく考察したが、語録を集大成した『朱子語類』は咸淳六年にすでに刊刻した情況で、『朱子語録格言』はどのようにして歴代に刊梓され、海外でも多くの讀者を有したのか。その原因は二つあると考えられる。其一、葉士龍は黄榦の嫡傳弟子で、朱門の二傳が輯編した書籍は当然他人の編纂より後世の人とくに道學家たちの重視や信賴を得る。其二、『朱子語類』は一百四十卷、二百四十余萬字、語録一萬二千餘條を有しており、卷帙は繁重である。言い換えれば、『朱子語類』は「朱子語録百科全書」で、その價格は高く、攜帶や閲讀も頗る不便である。これに比べれば、『朱子語録格言』の卷數は僅かに十八卷で、所收語録一千五百五十八條で、「精粹版語類」と言えよう。購入や傳閱あるいは保存、鈔寫は讀書人にとって、『朱子語類』よりすぐれる。分類上、『朱子語類』はただ二十

六門だけあり、『朱子語録格言』のほうは四十七類と細分され、検索閲覧に便利だけでなく、実用性も高い。『朱子語類』以前の古本朱子語録の書籍は佚して傳わらない情況の中、『朱子語録格言』の価値は言うまでもない。朱子學の基礎的文獻の一つである本書の編纂や刊刻及び流傳は朱子學傳播史上の興味深いことで、われわれの南宋以後乃至東亞朱子學史の視点を擴大させるものである。

南宋の朱子語録專書のほかに、朱子門人の手による多くの著述の中に朱子語録が含まれているものがある。こうした著述に朱子門人の朱子語録觀が反映されていると考えられる。この章ではかかる問題意識のもと、朱門著述三種と朱子語録との関係について、第五章で考察した。第一節では、朱子の嫡孫にあたる朱鑑によって編纂された『詩傳遺說』を取り上げ、朱鑑の事跡や世系を詳しく考察した上、『詩傳遺說』の編纂や版本、流傳、語録佚文の価値などを論じる。第二節では、朱子の二人の主要な弟子の書物に見える短い朱子語録集、すなわち輔廣撰『詩童子問』卷首所收「師友粹言」と陳文蔚撰『陳克齋先生集』卷七所收「師訓拾遺」に注目し、兩書に見える朱子語録佚文の高い価値を論じた。

以上、朱子語録群に関わる編纂者の生涯や編纂背景、特徴、版本、流傳などを究明することを通して、初期朱子學成立史の視點から、語録書の持つ思想史的な意味を考えた。

第二部「資料篇」は文獻學の手法を用い、「『晦庵先生語録大綱領』に見える朱子・范如圭・程端蒙・李方子の佚文」、「『詩傳遺說』に見える朱子語録の佚文」、「『詩童子問』と『陳克齋先生集』に見える朱子語録の佚文」、「朝鮮古寫本『朱子語類』に見える佚文」の四章を通して、諸書に見える朱子語録をはじめとする五万二千字の佚文を集め、通行本『語類大全』などの資料を利用し校勘記を擧げて、朱子語録ひいては朱子學研究の新資料とした。

(論文審査の結果の要旨)

朱子学研究における『朱子語類』の重要性はいまさら贅言するまでもない周知のことからであるが、近年、その重要性はますます高まりつつあるように見受けられる。

『朱子語類』の読書会・研究会がいくつも組織され活発に活動を展開しているのみならず、それらの研究会を統合して『朱子語類』の全訳注を目指すプロジェクトが進行しつつあることは、その顕著な現れの一つと言えよう。また中国においても幾種類もの『朱子語類』が出版されている。

ただ、このような『朱子語類』研究ブームには、実は一つ大きな弱点が潜んでいる。それは、現行の黎靖徳編『朱子語類』(『朱子語類大全』)のみに注目して、『大全』以前の様々な『朱子語録』や『朱子語類』にはほとんど無関心なことである。そのため『大全』のテキスト校勘に少なからぬ遺漏を生じているばかりでなく、さらにそのことに起因して、『大全』諸本の性格についても十全な注意を払っていないことも指摘しておかねばならない(最も通行している中華書局本が、あまり精善とは言えない劉氏伝経堂本を底本としているのはその端的な現れである)。

論者はかくのごとき『朱子語類』研究の陥穽につとに危惧を抱き、その不備を指摘するとともに、自ら『大全』出現に至るまでの『朱子語録』や『朱子語類』の基礎的文献研究にその精力を傾注してきた。本論文はその研究成果の集成であり、二部より構成されている。第一部「論考篇」は本篇五章に加え、序章と終章よりなる。第二部は「資料篇」で、論者の発掘したいくつかの『朱子語録』や『朱子語類』より『大全』から漏れた佚文を輯録している。この第二部も充実したもので、学術的価値は極めて高いが、以下では第一部に絞って報告する。

論者は第一章「古本朱子語録攷」において、『大全』に未収の「語録」四十種を挙げ、それぞれについて詳細な解題を附している。そのほとんどは佚書であり、これまでの朱子研究の歴史においては完全に埋没していたものを論者が発掘したのである。論者は当時の文集・地方志に収められた序文や墓誌銘を丹念に精査し、その成立・出版の経緯や編者の伝記についてほぼ能う限りの情報を提示している。その推定に一二疑念の残る点もあるが、全体としてその作業および結論にはほとんど間然するところなく、今後これ以上のものはもはや求められまいとの感を抱かせる完璧さである。また本章によって、朱子在世当時から盛んに語録編纂が行われていた事実が明らかになったことも大きな研究成果と評価できる。

第二章「朝鮮古写本『朱子語類』について」は、『朱子語類』の校勘に不可欠の資料として常用される朝鮮古写本についての考察である。この朝鮮古写本は海内の孤本として有名であるにもかかわらず、これまで十分な書誌学的ないし版本学的考察は行われてこなかった。論者は実見にもとづく正確な書誌情報を提供して従来誤認を訂正するとともに、その底本が淳祐十二年徽州刊本の魏克愚手校本であることを確定した。また徽州刊本(徽類)と蜀刊本(蜀類)との関係、語録体から語類体への変化におけ



る徽類の役割について論じているが、これも定説として然るべき卓見であろう。

第三章から第五章に至る三章は、いずれも論者のいわゆる「古本朱子語録」のうち現存するものについての文献学的考察であり、その編集上の特色、刊行年と伝承、校勘における資料的価値等について論述している。その詳細は省略するが、ここでも論者の論証は詳細を極めており、その論定はおおむね肯綮にあたるものである。第一第二章と同様、それぞれにおいて論ずべきものはほぼ論じ尽くした感がある。

以上述べたごとく、本論文は基礎的文献研究としては望みうる最高水準にあると言える。はじめに述べたとおり、『朱子語類大全』以前の様々な『朱子語録』や『朱子語類』はほとんど完全に等閑に付されていたのであるが、論者は独力でこの未開の分野を切り開き、かつその地をほぼ完全に整備してしまったわけであり、その読解力並びに文献学（目録・版本・校勘・輯佚）の力量の高さは賞賛に値する。

本論文に対する不満があるとすれば、それは思想史的観点からする論があまり見られないことであろう。各語録における編者の編纂意図や当時の朱子学の状況についての言及はあるが、それは表面的あるいは類型的なものにとどまっていて、深い考究はなされていない。本論文のごとき文献学的研究であるならば、それはやむを得ないこととも言えようが、論者自身が序章で、「本研究の研究方法」として「思想史学と版本学的方法を融合させ」、「個々の語録書の持つ思想史的な意味のみならず、語録書間の相互関係の中に潜んでいる思想史的な意味を考える」と述べていることからみれば、実際には版本学に比重がかかりすぎているとの印象は否定できまい。ただ、そのことが本論文の文献学的考察の成果を損なうものではないことは言うまでもなく、またこの論者の言からしても、思想史的研究の必要性が自覚されていることは明らかであり、今後の研究に期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年2月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。